



虚を衝かれる

大峯郁衣

ある日曜日の東京へ向かう朝だった。

バスから降りて、停車中のJR電車を目掛けてダッシュする。電光掲示板を見ると発車まであと二分。よし乗るゾ。急げ。前の女の人が立ち退いた後に続いて、スイカカードを券売機に挿入して、平日よりも二〇〇円安いグリーン券を購入する。

チラッと画面を見ると「グリーン券料金〇〇〇円、カード残高×××円、不足料金〇円、おつり二〇〇円」との表示。「おつり？」といぶかりながらも、チャリンと出てきた一〇〇円玉二個を手取る。

と、背後からいきなり怒鳴られた。「おい、よく見ろよ。横入りすんじゃないよ。子どもが見てるだろ。その二〇〇円はオレのだ。返せ！」

野球帽のツバを後ろ向きにかぶった男性が私の顔を覗き込んで、あつという間に二〇〇円を掴み取っていった。その時の私の頭の中といったら、その朝のどんよりした空模様にも似て、ゆるゆると回転し始め「後ろに誰も並んでなかったよ」とつぶやくのみ。

ハッと我に返って、何が何だかわからないままに急いで改札口をとおって電車に乗り込んだ。フーツ。着席し

て心臓の鼓動が落ち着いてくると、あの二〇〇円のナゾが浮かんできた。スイカでつり銭が出てくるはずがない……、だのに、なぜ。でも、この推測もこれまでの私の体験内でのこと。

しばらくして、検札にやって来た車掌さんに事の顛末を話すと、すぐに私のスイカのデータを読み取り専用機に載せてチェックしてくれた。「残高は合ってますよ」と安心させてくれた。あの二〇〇円は私のスイカにはプラスにもマイナスにも作用していなかったのだ。だが、彼にも、つり銭がなぜ出てきたのかは判らないと言う。「朝から災難でしたねえ」と同情の愛想笑いを示してくれて対応は終了。

スイカよ、事のカラクリを知っているのはあなただけです。あなたはデジタルという二進法の速さで「おつり二〇〇円」を処理し、無関係の私に事実の結果だけを印字して知らせてくれる。でも、私は結果に至るプロセスを知りたい！そこで、私は仕方なく推測します。このおつりは私の前に並んでいた女性のデータ処理不足から生じたものじゃないのかしらと。それが次に並んだ私のカードに仮初めにも印字されて処理されたのだと。だとすると、あの野球帽の男性は、いま流行りのつり銭ドロボー？

私は今でもあの二〇〇円の件を考えることがある。あの時の私の虚を衝かれた顔はどんな顔だったのだろう。想像すると情けないやら可笑しいやら。

スイカよ、あなたは人間を煙に巻いた上に邪推深くします。でも、人間の頭と心は、おそらく年齢に関係なく、いつまで経ってもアナログのままなのです。